

## 愛に生かされる道

(1コリント12・31b〜13・13)

## 一、なぜ「愛」について語ったのか

なぜパウロは、「愛」について語ったのでしょうか。前後関係から見ますなら、こつということが分かります。12章から14章まで、パウロは、ギリシア文化の影響を強く受けていたコリントの教会に起きていた霊的な現象について、指導しています。コリントに興された主イエス・キリストを信じる人たちは、すなわち教会の人たちは、霊的現象を歓迎し、喜んでいたようです。「私は御使いが語ることで語る事ができません。バラバラバラバラ」と得意になって異言を語った方がいたと思われま。13章1節より、そのようなことが想像できます。パウロは、教会はキリストのからだであり、からだであるからには調和が大切であると考えていましたから、コリントの教会に現れている霊的な現象を潰すことなく、すべては秩序を保って行われるべきであると説いたと考えられます。12章から14章まで、御霊のことにについて、すなわち御霊の賜物について論じています。その流れを途中で中断するようにして、愛について語ったのが13章です。このように受け止めますと、13章の位置付けが見えて

くると思われます。

## 二、パウロが語った「愛」

ギリシア文化の影響を強く受けたコリントの教会員たちは、愛について良く分かっていなかったと考えられます。と言いますのは、ギリシア人が意識した愛は「エロース」の愛だったからです。今日「エロース」と聞くと、男女間の愛のイメージを思い浮かべますが、ギリシア文化においてはそれだけではなかったようです。「自分から善を求めろ」「自分から努力して上を目指す」「人間の側から神に近づく」「自分で救いを得ようと努力する」という意味もあつたようです。新約聖書には「エロース」ということが一度も出てきません。理由は、パウロが語る愛と全く正反対の愛だからです。では、聖書で使われている「愛は、何なのでしょうか。一つは、ご存じのように「アガペー」です。もう一つは「フィリア」(＝親愛の情)です。「アガペー」は、ギリシアの古典においては、ほとんど使われていなかったことばのようなです。たまにこのことばが使われる場合は、「あなたは私にとって大切です」という意味合いで使われていたようです。ですが、七十人訳聖書という旧約聖書のギリシア語訳では、「アガペー」が神の愛の訳語として使われています。例えばホセア書3章1節の

主は私に言われた。「再び行って、夫

に愛されたいながら姦通している女を

愛しなさい。の「愛する(アハブ)」の訳語として「アガペー」が使われています。一方で、七十人訳では、男女間の愛についても「アガペー」が使われているとのことですが——こちらは自分で確認していませんが——。そういうわけで、結果として「アガペー」を広めたのは、キリスト教会でした。新約聖書で「アガペー」ということばが使われる場合は、キリストによって現された「神の愛」の意味で使われています。「神の愛」は、主イエス・キリストの十字架の死において現されました。この愛を、パウロはコリントの教会員たちに諭したわけですから。

## 三、神は「愛」である

愛(アガペー)は、主イエス・キリストにおいて現されました。愛は、生まれながらの人間が持ち合わせない性質です。なぜなら愛は、神のご性質そのものだからです。生まれながらの人は神のご性質から離れていますから、愛(アガペー)を持っていません。キリストによって現された愛を持っています。ですから、主イエス・キリストを信じるならば、愛の人に変えられて行く希望はあります。それは人の努力によって身に付けることのできる愛ではなく、「私には愛がない」と知って、神の前に降参する人が、得る性質の愛です。

13章4節より7節を見てまいります。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。とあります。いかがでしょうか。「私はキリストを信じてから、それらをすべて守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか」と思われるでしょうか。それとも「神さま、申し訳ありません。私にはできません」と答えるでしょうか。どちらが誠実でしょうか。後者と、私は思います。最後に、13節を見てまいります。<こつこつ>で、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。とパウロは語りました。この聖句は、理屈で考えるよりも、次のように受け止めた方が良いと思います。それは、「神は愛(アガペー)である」ということです。「神は信仰である」とは言えません。ことばが合いません。「神は希望である」と言つのも、的外れな気がいたします。やはり、神は愛(アガペー)なのです。神は、自己犠牲的な御方なのです。ならば、主イエス・キリストを信じる私たちも、神の恵みによって救われ、自己犠牲をいとわない人間に日々変えられると信じる者です。